

失われた夜の歴史

【立ち読み】



本書に寄せられた賛辞

イーカーチ教授は他に類のない領域と、独創性を持つ本を生み出した。彼の近代以前の文明における「夜景」の研究は、文学から社会史、心理学、そして思想史にまでわたっている。これは第一級の先駆的な功績である。それはまさに、暗闇のきわめて重大な領域に光を投じるものだ。

——ジョージ・スタイナー（作家、哲学者、文芸批評家）

興味がつきない……思わず夢中で読んでしまう……（イーカーチは）途方もなく広範囲にわたる、さまざまな文化の資料を漁り、魔女から消火活動、建築、そして家庭内暴力に至るまで、ありとあらゆることを教えてくれる。……歴史的な価値のある研究だ。

——テリー・イーグルトン（文芸批評家、哲学者）『ネーション』誌

その昔、夜に何が起こっていたのか。夜、誰が何をしていたのか。人々はどのようにして暗闇に、そして暴力や火事の危険に対処していたのか。睡眠のリズムとは何か、また夜の社交や肉体関係におけるしきたりとはどのようなものだったのか。イーカーチは近世ヨーロッパとアメリカの暗闇の世界を、数多くの証拠資料を駆使してわかりやすく解明してくれる。本書は長年にわたる研究の成果であり、まさに新発見だ。

——バーナード・ベイリン（ハーバード大学名誉教授）

いくらか想像力のある者なら誰でも本書に魅了されるだろう。だが同時に、本書が従来によく知られている歴史とは正反対のものだと気づくはずだ。……すばらしいのは、イーカーチが忘れられた夜の世界を再発見するために労を惜しまないことだ。……これは要約することが不可能な、体験すべき本なのだ。

——デイヴィッド・ウットン（イギリスの歴史学者）『ロンドン・レヴュー・オブ・ブックス』誌

夜の生活——そのさまざまな危険や性生活、独自の儀式、リズム、労働様式、階級意識、そしてその緩やかな変質などに光を投げかけることによって、これまでぼんやりとしか見えていなかった新しい世界の全容を明らかにする力作。この先駆的で説得力ある研究のおかげで、産業革命前の夜の歴史が誕生した。

——テリー・モーガン（ジョンズ・ホプキンス大学・歴史学教授）

イーカーチにとって、夜は独特の風俗や習慣を持ち、人々の活動と往来が絶えない、活気に満ちた領土だった。……彼は、代々の歴史学者たちに無視されてきたその概日周期の一部分を、驚くほど鮮やかに甦らせた。イーカーチは夜のポケットを裏返して、その中身を私たちの前に並べて見せた。……本書は、私たちに古えの夜の神秘を思い出させてくれる。

——アーサー・クリスタル（エッセイスト・編集者）『ニューヨーカー』誌

【目次】

はじめに もう一つの王国 10

夕暮れ時 16

第I部 死の影

序 20

第1章 夜の恐怖——天上と地上 25

I 悪が跋扈する／II 月と有害な霧／III 悪魔・精霊・魔女たち／IV 危険な夜

第2章 生命の危険——略奪、暴行、火事 59

I ナイトウォーカー／II 犯罪者たち／III 暴力と惨事の舞台／IV 火事——最も恐るべき暴君

第II部 自然界の法則

序 98

第3章 公権力の脆弱さ——教会と国家 101

I 闇を照らす光／II 夜警の歌／III 法の空白

第4章 人の家は城塞である——よい夜のために 141

I 夕暮れ、危険な予感／II 命と財産を守る／III オカルト信仰、夜のまじない／IV さまざまな明かり／V 助け合う隣人たち

第5章 目に見える暗闇——夜の歩き方 182

I 夜の外出／II 暗闇教育／III 夜歩きのための光と感覚／IV 不吉な時間／V 夜は人間を試す

第Ⅲ部 闇に包まれた領域

序 226

第6章 暗闇の仕事——仲間と共に 234

I 広まる夜間の労働／II 夜、働く人々／III 夜にふさわしい仕事／IV 寄り合いと物語

第7章 共通の庇護者——社交、セックス、そして孤独 276

I 酒場の魅力／II 恋と情事／III バンドリング（結婚前のお試し）／IV 自己探求、瞑想と読書

第8章 騎士^{ナイト}ウオーカー——王侯貴族たち 310

I 夜を支配する権力／II 仮面舞踏会／III 伊達男、ギャングたち

第9章 束縛から放たれて——庶民 334

I 少数派、受難者たちの聖域／II 若者、召使い、奴隸たちの気晴らし／III 窃盗、密輸、売春／IV もう一つの現実

第Ⅳ部 私的な世界

序 378

第10章 寝室でのしきたり——儀式 381

I 睡眠の時間、就寝の時刻／II 安らかな眠りのための儀式／III ベッドと階級／IV ベッドを共にする仲間

第11章 心の糸のもつれ——眠りを妨げるもの 410

I 眠りの恩恵／II うつ病、悪夢／III 騒音、寒さ、害虫／IV 睡眠を奪われた人々

第12章

私たちが失った眠り——リズムと天啓

431

I 第一の眠り、第二の眠り／II 二回の眠りの間に何をしていたか／III 夢とヴェイ
ジョン

夜明け

466

I 夜の革命／II 夜を昼に変える／III 失われた暗闇

謝辞
488

注・参考文献(1)

図版クレジット(14)

解説
510

はじめに、神は天地を創造された。

地は混沌であって、闇が深遠の面であり、

神の霊が水の面を動いていた。

神は言われた。「光あれ」。こうして、光があった。

神は光を見て、良しとされた。

神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。

——『聖書』「創世記」第1章1～5節（新共同訳）

夜は私たちが何であるかを、そして昼は私たちがどうあるべきかを教えてくれる。

——トマス・トライオン（一六九一年）¹

本書は、産業革命到来以前の西洋社会における夜の歴史を探求する試みである。私の主な関心は、当時の人々が、日没後の現実的及び超自然的な危険に直面しながら作り上げた生活様式にある。犯罪や魔術に関する研究は多々あるにもかかわらず、夜は、それ自体としてはあまり注目されなかった。主な理由は、長い間、夜にはほかに重要な事柄など起きていないと考えられてきたからだ。一七世紀の詩人で劇作家トマス・ミドルトンによる戯曲の一節、「眠ること、食うこと、屁をひること以外に何もすることがない」が、伝統的な考え方を端的に言い表しているかもしれない。ヨーロッパの歴史学者たちは、特に近代以前において、意欲的な一部 of 学者は別として、太古から存在する明るい昼から暗い夜に至る経過を無視してきた。人々は各家庭で、かなり長い時間を暗闇の中で過ごしていたにもかかわらず、夜はさほど重要ではない。「未知の領域」、人類の経験の忘れられた半分のままだった。ジャン・ジャック・ルソーは『エミール』（一七六二年）の中で、「私たちは人生の半分は目が見えない」と書いている²。

近世における夜は、昼間の生活の後ろにある背景幕、あるいは自然の隙間などではなく、数多くの独特なしきたりを持つ、紛れもない一つの文化を具現していた。その特殊な性格の証として、イギリスとアメリカでは、暗い時間帯はしばしば「ナイト・シーズン（夜の期間）」と呼ばれていた。当然ながら、夜と昼は共通の性質を持つており、さまざま違いはあっても、それは程度や強さの問題だった。だが、食事や健康状態、服装、移動、人付き合いなどが昼夜で変化するのに応じて、社交的な出会いや労働のリズム、そして世間一般の道德的慣習（たとえば、魔術や性生活、法、社会的権威などに対する考え方）にも重大な変化が生じた。そこで本書は、長年にわたって夜間の活動が過小評価されてきたことに異議を申し立てるだけでなく、あるイギリス詩人が「もう一つの王国」と呼んでいるように、昼間の現実とは大きく異なる、豊かで活気あふれる文化を掘り起こすことを目指している。それに加えて、暗闇は人類の大半にとって、通常の生活から逃れることができる聖域となっていた。つまり、影が長くなるにつれて、人々は心の内に秘めた衝動を表し、目覚めている間、または夢の中の抑圧された欲望を、無邪気なものであれ、邪悪なものであれ、実現する機会を与えられたのだ。本来的に解放と復活の時である夜は、善良な者にも邪悪な者にも、つまり通常の生活における有益な力にも有害な力にも、自由を与えたのだ。「夜は恥を知らない」ということわざもある。夜は危険に満ちていたにもかかわらず、沈む太陽から新たな力を引き出していた人々は少なくなかった³。

本書は12章から成り、4部に分かれている。第一部「死の影」では、夜の危険について扱う。肉体と魂に対する脅威は日没と共に増大し、また危険の度合いも高まった。おそらく西洋史上でも、夜がこれほど恐ろしいに見えたことはなかっただろう。第二部「自然界の法則」では、夜に対する公的な反応、及び一般大衆の反応の両方を取り上げる。最初に、教会や政府が夜間の活動を抑制するために

講じた、消灯令から夜警に至るまでのさまざまな抑圧的手段について考察する。都市や町で、夜間も公共空間に立ち入ることができるようになったのは、一八世紀に入る直前のことだった。一方、一般庶民は必要に迫られて、都市部でも田舎でも、家庭や出先で、暗闇に対抗するために魔術やキリスト教、あるいは体験的に得た自然の知識に頼った。この民間のしきたりや信仰が入り混じった母体を背景として、日没後の共同体における活動という、表面からは見えない驚くべき底流が生み出されたのである。第三部「闇に包まれた領域」では、夜間に男たちや女たちが、仕事や遊びのために集う場について見ていく。闇に覆い隠されていることが社会的な制約を弱め、家族たちや友人たち、恋人たちの間に親密な領域を創り出した。もし夜が、大方の人間にとって個人的な自由の時間だったとすれば、社会階層の両端に位置する階級にとつては特別な魅力を發揮したのである。これらの章では、上流階級と庶民双方にとつての、夜の多面的な重要性を考察する。日没後は、力が強者から弱者へと移った。そして、日常生活の苦しみを忘れられる究極の避難所である眠りが、次の第四部の中心となる。第四部「私的な世界」では、就寝時の儀式と睡眠障害、そして睡眠のパターンについて論じる。この睡眠のパターンは太古から主流を占めているものであり、それによって、産業革命前の家庭は真夜中に目を覚ましていた。家族たちは排尿や喫煙、さらには近くの隣人を訪問するために起き出した。むろん、性交したり祈ったりした者もいた。さらに、歴史的にきわめて重要なのは、人々が慰安と自己認識の源として大きな役割を果たす彼らの夢について熟考したことだ。最後に、本書の結びとなる「夜明け」では、一八世紀半ば頃までに都市や大きな町で進行しつづつあった、暗闇の神秘性の排除について考える。すでにその時、現代の私たちの「二四時間週七日」社会の土台が築かれたのであり、それが個人の安全と自由に重大な影響を及ぼすことになった。

この夜の生活についての物語は、主にスカンディナヴィア地方から地中海に至るまでの西ヨーロッパを取り扱っている。イギリス諸島が私の調査の中心となつているが、ヨーロッパ大陸全体にわたる広範な資料を使用している。それに加えて、植民地時代のアメリカや東ヨーロッパからも関連性のある情報を集めた。本書で扱った時代も同様に幅広く、中世後期から一九世紀初頭にまで及ぶが、主体となるのは近世（約一五〇〇〜一七五〇年）である。しかしながら、時にはもつと古い時代の習慣や信仰と比較、あるいは対照するために、中世や古代の世界にも言及している。本書で探求した新事実の多くが近世に特有なものだったが、明らかにそうでないものもいくつかあった。その視点から見ると、この研究は、産業革命前の時代における夜の生活についての、私が考えていた以上に広範囲にわたる探索となった。

同じ理由によつて、私は時おり、ハンフリー・オサリヴァンやエミール・ギョーマンといった、一九世紀の農村の生活を間近で観察した人々の、農民の立場からの見識も参考にした。ヨーロッパやアメリカの多くの農村地域における価値観と伝統は、輸送手段と商業が大きく発展を遂げた一八〇〇年代の末頃までは著しく変化していないという歴史の見解に、私は強く賛同するものである。トマス・ハーデイが『ダーバヴィル家のテス』（一八九一年）で書いたように、テスとその母親では世界観に「二〇〇年もの歳月」の隔たりがあり、「彼らが一緒にいると、ジェイムズ一世時代とヴィクトリア時代が並んでいるようだった」のだ。

夜の生活の時空を超えた均一性は、近世におけるさまざまな差異に勝ることが少なくなかった。夜の文化は決して一枚岩的なものではなかったが、人々の姿勢やしきたりに大きな差はなく、似たり寄つたりだった。ちょうど産業革命前の人々が、日没後に、同じ不安を共有していたように、多くの

行為も共有されていたのだ。この発見によって、私は本書をテーマ別に構成しようと思いついたのだが、同時にそれは、夜の本質的な重要性についての私の考えをいっそう強固なものにしてくれた。この昼と夜という自然のサイクルの衝撃はたいそう強く、しばしば文化や時代の違いを超えたのである。求婚の様式や人工照明のように相当のずれが見られた場合は、文献に当たって確かめた。だが、一八世紀までは、夜の生活はどこでも著しく変容することがなく、一八世紀に入っても、都市や町で変化が起きただけだった。実際、前述の時代においては、時間的または地域的な違いよりも、町と田舎の違い、及び社会的地位や性別から生じた違いのほうが、大きい場合が多かった。

私の調査は、こうした普遍性の高い主題から想像されるように、きわめて幅広い資料にもとづいている。最も貴重な情報源は、私的な文書類、つまり手紙や回顧録、旅行記、そして日記などだった。研究対象の幅広さにもかかわらず、本書は主に個人の男女の生活を中心に構成されている。とりわけ日記は、中流から上流階級の人々についてのこうした研究を可能にしてくれた。もつと下の階級については、数少ない日記や自伝のほかに、裁判所の宣誓証言という情報の宝庫を活用した。ロンドンの主要な裁判所における裁判を記録した一八世紀の小冊子『中央刑事裁判所・裁判記録』^{オールド・ベイルリ}は、都会の庶民生活に関する比類のない資料だった。伝統的な信仰や価値観については、各種の用語辞典や辞書、そしてとりわけことわざ辞典がたいそう役立った。フランスのある聖職者はことわざについて、「農民たちの信条、彼らが精神の最も奥深いところで円熟させ、自分のものにした知識がそこにある」と述べている。⁵さまざまな階層における考え方を探るために、私は数多くの「高尚な」文学と「通俗的な」文学の両方を、つまり詩や戯曲、小説だけでなく、バラッド（物語のある詩・歌）や寓話、^{チャップブック}呼び売り本も参照した。これらの引用については慎重を心がけ、想像力による作品が社会の現実から

逸脱している場合はその旨を指摘した。教育的な目的で書かれた文書、主に説教や宗教的なパンフレット、助言をまとめた手引書なども役に立った。一八世紀の新聞や雑誌、医学や法律、哲学関係の論文、それに農業関係のパンフレットなども、啓発されるところが大きかった。また、例証や説明に役立てる目的で、医学や心理学、人類学の研究を参考にした。その他、大衆文化から失明に至るまでのさまざまな主題に関する最近の著作や、夜の生活の特定な面に焦点を当てた研究論文もたいへん有益だった（主題の一貫性のために、夜間の戦争に関する資料は除外している）。

最後に次の点を特に強調しておきたい。私はこれまでに何度か、夜が日常生活に及ぼす影響の問題を、暗闇が一般に社会的安定または混乱の原因となったかどうかを含めて、取り上げる機会を得たが、私が最も関心を抱いているのはその問題ではなかった。できることなら、本書のページに含まれた情報が、夜をそれ自体として研究することを十分に正当化してくれるようお願いしている。

ロジャー・イーカーチ

ヴァージニア州、ロアノーク、シユガーローフ・マウンテンにて

二〇〇四年一月

*本書中の年月日はすべて、新しい年が一月一日から始まるグレゴリオ暦で表記してある。

夕暮れ時

羊飼いたち、そして娘たち、羊の群れを駆り集めよ。大気は早くも濁り出し、太陽はすでにその大いなる道のりを走り終えようとしているのだから。

——ジョン・フレッチャー（二六〇年頃）

夜のとばりは、注意深く観察すると、下りるといふよりむしろ上がると言つたほうが適切だ。薄闇はまず谷間に出現し、傾斜した山腹をゆつくりと這い上がっていく。「サン・サッカー」と呼ばれる徐々に薄れゆく光線が、まるで翌日のためにしまいこまれるかのように、雲の彼方へと逃げ去る。牧草地や森林地帯は薄闇に覆われ、太陽が低く沈んで地平線の下に隠れてしまった後も、西の空は赤く輝いている。もし農夫が大空を目安としていれば、まだ鋤を使う手を止めないかもしれないが、次第に濃くなる陰が彼に帰宅を促す。ミヤマガラスが再び姿を現し、牛たちが鳴き声を上げる中、ウサギは隠れ場所へと急ぐ。メンフクロウが飛び立って荒野の上を舞い、陰謀を企む暗殺者の口笛のような鳴き声を上げながら、ネズミにも人間にも等しく警戒心を起こさせる。どちらも幼い頃から、死の先触れであるこの甲高い声を恐れるように教え込まれているからだ。昼の光が薄れるにつれて、風景から色が消えてゆく。茂みはくつきりとした輪郭を失い、さまざまな濃さが混じり合った灰色に溶け込

んで、大きくなったように見える。夕暮れ時とは、アイルランド人によれば、人も藪も同じように見える時、あるいはもつと不気味なイタリアのことわざによれば、犬も狼も同じように見える時なのだ。

夜の闇は、手で触ることもできそうに思える。夕闇はやつて来るのではなく、「濃くなる」のだ。旅人たちは、旧約聖書で描かれているエジプトの王に降りかかった闇と同じように、見えるだけでなく触れることもできる黒い霧に、包み込むように「襲いかかれる」のである。太陽が去つてしまうと、空から冷たく、湿った、有毒な夜気——「夜霧」や「有害な霧」とも呼ばれた——が下りてくるという説が、広く信じられていた。世間一般の思い描くイメージでは、夜は「下りて」きたのだ。大気はもはや、昼間の歓迎すべき光線によつて洗われた、透明で無臭の、穏やかなものではない。シェイクスピアが「病んだ昼光」と書いたものは、有害な湿気をたつぷり含み、ひれ伏した野山を汚染して、伝染病や疫病を広げるのだ。『尺には尺を』（一六〇四年）の中でヴァインセンシオ公爵は、「急ぎなさい。夜気が近づいている」と警告する。

夕焼け時、家禽を閉じ込める時間、手探りする時間、カラスの時間、昼が去る時、フクロウの光など——英語は、昼から暗闇への推移を表す表現力に富む慣用語の膨大な集積を持ち、アイルランドのゲール語には、午後遅くから暗くなるまでの一連の時間区分を表すためだけに、四つの用語がある。昼夜を通じて、これほど豊かな用語を生み出した時間帯はほかにない。工業化の到来以前には、普通の男や女の生活にとつて、それ以上に重要なものはなかったに違いない。ほとんどの人間にとつて、夕暮れの通例の呼び名は「シャッティング・イン」、つまり番犬を外に放したら、戸に門をかけ、錠戸に差し錠を差す時間だった。というのも、夜の汚れた、悪臭のする空気や、その尋常でない

暗さは、どんな危険をもたらすかわからなかったからだ。その危険は、現実のものと想像上のもの
両方だった。そして奇妙なことに、西洋の歴史においては、ルネサンスから啓蒙思想の時代にかけて
の時期ほど、夜の危険がもたらすものを恐れるさまざまな理由があつた時代はほかにないのである。

本書は、まさに「体験」する書物である。電灯やガス灯が普及する以前、人々はまだ弱々しい明かり（蝋燭やランプなど）を手にするだけだった。夜の闇は深く、広大で、そこは昼とはまったく異なる「もう一つの王国」だったのだ。本書は膨大な一次資料を駆使することで、こうした夜の相貌を初めて一貫して浮かび上がらせることに成功した。暗闇の中では、視覚は利かず、代わって聴覚・触覚・嗅覚などが研ぎ澄まされる。読者は本書の数々のエピソードを読み進めるうちに、まるで自身が時空を超えて、近世の闇のただなかに佇んでいるかのような感覚を覚えるに違いない。

悪魔や悪人どもが跋扈し、災いにあふれているとともに、昼の規律や拘束を離れ、自由と快楽を求めて解き放たれる人々——その描写は驚くべき出来事の連続だ。たとえば、夜間、一度起きてはまた寝る「分割睡眠」が常態だったこと。その二回の眠りのあいだのひとときは、きわめて重要だった（夢のヴィジョンを振り返ったり、内省したりもした）。また、宵闇とともに、空から有害な霧が降りてくると信じられていたこと（日没は美しいものではなく、不安を掻き立てた）。夜の外出には独自のしきたりがあり、また月相を始め、夜の歩き方の知恵が欠かせなかった。時には赤の他人や召使いともベッドを共にしたり（ベッド仲間）、バンドリングという結婚前のお試し制度のユーモラスな実態も明かされる。あるいは、魔術やまじないへの信仰や、現代人の目からはひどく奇妙で残酷なものもあるその方法。糸紡ぎや編み物の夜の寄り合いにおける、物語の伝承や女性たちのローカル・ネットワーク力などなど。ありふれた室内の風景ですら、夜には一変した。蝋燭やランプは頭上ではなく低い位置に置かれたので、天井は暗く、焰が揺らめく中で顔や家具なども前面しか見えなかった。

今では迷妄とも思える数々の出来事も、さまざまナリスクと不確かさに満ちあふれた当時の闇夜を思えば、その心情も理解できるだろう。興味深いのは、教会や役人が、夜間をより安全にするよう努めるよりも、夜を人々の力の及ばぬ領域として、その不可侵性を温存させようとしていたことだ（闇への恐れあつてこそその光＝神や権力というわけである）。だが、こうした姿勢が「法の空白」となり、夜の危険と隣り合わせの自由を人々にもたらした。深い闇の中、つかのまの自由を愛おしむ人々の生も、今日よりよほど濃密であつたに違いない。

やがて経済・都市・科学の進展、中流階級の勃興などとともに、夜はより明るくなり、華やぎを増す。封建秩序の崩壊から近代産業社会への大きな転換期に当たるこの時期に、夜を巡る支配権や、人々の意識も劇的に変わろうとしていたのだ。

歴史に埋もれた夜の姿を活写した本書は、既成の歴史を見る目も変えるだろう。そして、私たちの生きていくこの眩い光の時代が、どれほどの闇夜の蠢き、畏怖や幻影などを封じ込めてこそ成り立ってきたのかも実感されるに違いない。

最後になったが、文学・社会・生活・心理・思想・魔術……と広範な分野に及ぶ原著を、わかりやすく的確な日本語に訳していただいた樋口幸子・片柳佐智子・三宅真砂子さんに多大の感謝を！

本書出版プロデューサー 真柴隆弘